

子どもの遊び（その7）

E・A・A・フェルメール

浜口順子訳

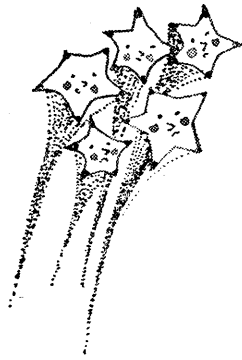
第四章 イリュージョンの世界

（一）イリュージョン的遊び

イリュージョン的な

遊びを観察しようとし

ても、子供の遊びがくりひろげられている公の場でそれを見つげ出そうとするのは、それほど容易なことではない。すでに、子供の人格的発達にとってイリュージョン



的遊びが重要である点には留意してきた以上、それが実際には稀にしか観察されないと残念な思いや不安な気持ちにもなるだろう^①。

この場合、子供の遊びを發展させることができるように大人側が用意する「自由」という観点から考察せざるを得まい。あるいはまだそれでは不十分であろうか。

まず立ててみるべき問いは、イリュージョン的遊びとしてわれわれが実際に見ようとしているものが何なのか、ということについてである。イリュージョン的遊びは明確なゲシュタルト（外的に現れたイメージ像）をもっており、それは子供自身に意識されている。またそれは、言葉による応答という出来事すら内包した空間的世界である。イメージ化という明晰性を有するにもかかわらず、イリュージョン的な遊びは、その場に居合わせている観察者の目に直接的に見えてくるものではない。イリュージョン的遊びは、たとえばボール遊びのように、豊かな運動性をもって現れてくるのではない。それは子供の内面と外側とにあるイメージの世界が、ただ部分的に実現されたか具体化されたものなのである。粗雑ともいえるぎこちない行動で、子供はイメージ的空間の『扉』を開いてみせる。たとえば「ここがお家だよ」と言うことによって、言葉がシンボル（象徴）的な行動を補完して、世界を喚起していくのだ。遊び場のわきを通り過ぎながら子供の遊びを眺めていても、子供たちが

そこである世界を創造しており、しかもその大部分は、われわれの具体的な現実性に据えられた眼差しの下では見えないままになっていることを多分見過ごしてしまうだろう。遊び場のすみっこ、あるいはベンチの上などにいる子供は、遊びつつ何かを得ている。つまり遊び仲間と一緒にいる場合でも、彼のイリュージョンの世界に住まう者たちの中で、自分固有の部分を獲得するので。

イリュージョン的遊びにおいて、子供はモノがすでに担っている意味に他の意味を付け加え、二重の意味をもつ世界と共に遊ぶ。世界が子供の前では『のような』という意味を得るのだ。現実性と共存するこの『のような』というアナロジーは、論理的なものではなく、感情的に体験されるある同等性である。少年が学校へと自転車をこぎながら、ツールロードウイフランス大会レースにおいて先頭を競って疾走している偉大なるレーサーの姿に自分を見立てて空想を広げることがあろう。彼はその時、登校途中で自転車に乗っている自分を忘れていたわけではなく、現実を重層的に解釈して、『のような』

というイリュージョンの方へと価値を傾斜させているのだ。こうした重なり合った解釈を可能にするには、現実―学校まで自転車をこいでいくこと―と自己とを共存させなければならぬ。トゥール・ドゥ・フランスという目標が、現実の大会と一致する必要はない。少年は好きなきにその『疾走』を体験しなおせるし、何度でもいろいろなトップ選手たちを勝ち抜くこともできる。現実の上では少年と関わりのない選手たちは、無論、少年のこんな個人的世界における自分たちの役割や、はたまた少年の静かなる勝利の栄冠などを知るべくもないわけだが、少年はそういう選手たちに対して勝ち名乗りをあげるので。イリュージョンの遊びは子供にとっては明確なゲシュタルトをもつが、それは子供が意識的に創り出したものだ。そしてその際子供は、自分がその遊びに感情的に巻きこまれた状態にあることを認識してはいるが、これはもとより反省的な知というものではない。

これまで述べてきた遊びの諸位相の中には、意識レベル上の違いがすでに見てとれる。つまり遊び的循環性運

動と感覚受感的遊びは、遊び的な秩序づけ行為やルールの遊びに比べて、遊びのゲシュタルトが、対象物を扱うプロセスでより暗示されているのだ。後者（秩序・ルールに特色がある遊び）が子供の発達後期に現れてくるのに対して、イリュージョンの遊びの特徴は、きわめて幼ない頃からこうした『のような』的世界を呼び起こす点にある。形態付与やルールを伴う遊びが優勢になるずっと以前から、子供は固有の世界創造という偉大なる発見のきざしを呈する。自分固有の世界における人格的（私的）な意味は、子供が他の人たちと共有している公共的現実性に目を向けるようになるやいなや出現する^②。しかしそれ以前に子供は意味付与そのものを発見しており、つまり抽象的な行動およびそこに現れている意味を知ると同時に、シンボリックな所作を通して自分の印象の意味をも認知するという、人間性の自由をも見出すのである。このような発達について見ていこう。

(二) 人格的発達におけるイリュージョン的遊びの 発展

一才半位になると子供はもう『のような』的世界を自分の行為について喚起することができるようになる。たとえば眠ったふりや食べるまねをする事などがそうだが、これらの所作には、精密さに欠け粗雑であるという特徴がある。したがってこれはシンボルの意味をもつ行動である^④。この時期、子供は言葉とシンボルの行為とを同時に活用する。その際子供は『ここに今ある』具体的な状況を越えて、何か別の意味へと促されており、同様にして子供は『ここに今ある』モノを別の世界―『のよるな』の世界―へと置き換えることもする。こうした意味の置き換えができるためには、直接的で具体的な行為を解消し、言葉や行動のシンボル性(象徴性)を把握すると共に、自ら意味付与を行わなければならない。親は言葉をコミュニケーションの道具として使いたが、言葉という媒介によって、直接的でない行為が可能

であることを子供に示している。たとえば親が椅子というものについて語るにしても、結局言葉という媒介物を介して間接的に椅子を扱っているということだ。その際親と子供はまさに共同的な現実の中にある。しかしながら子供の目には自動車としてイメージされるようななかを契機に、椅子を自動車に見立ててしまうような場合、子供は言葉や行動という媒介によって『のような』という世界を創り上げることができるのだということを発見するに至る。

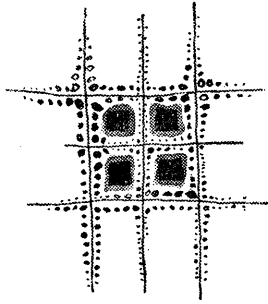
言語によって子供は―行動によっても同様だが―イリュージョンの世界にゲシュタルトを与える。言葉は、ちょうど行動がまた自我の表現であるように、表現手段である。表現的な行動とは常に自我が『行為しだす』(acting-out)ものであるが、そこでの意味付与はまた他者との共有的世界に投射される。子供は自分の意味付与が他者に理解されるという経験をよくしている。魔法で小犬に変えられたソファのクッションをやさしくなでている時などは、そんな経験の一コマであろう。母親と遊

びながら、子供は『小犬』とクッションとを結ぶ感情的なアナロジーが、母親という他者によっても同じように体験されているのだと感ずる経験をする。そして子供は『のような』という世界の中で、自分自身をその世界の創造者として意味づけている自我をも経験する。この自我経験はさしあたり、自己意識に欠けた自我所有以上のものではない。しかし次のような場合、子供は自分の創造的行為についてさらに何かを自覚するようになる。たとえばテレビのスイッチボタンを、イリュージョン（空想）上の自動車のダッシュボードに仕立てていじくりまわしてみたいのに、それが大人によって許可されない場合だ。母親にテレビにさわることを禁止されてしまうこともあろう。テレビは、公共的な現実の中でもつテレビとしての意味を保持し続けなければならないのだ。「さわってはいけない」という警告は、子供にとって理解不能なことではない。なぜなら子供は遊びながらも、そこで自分だけの意味付与を行なっていることを忘れてはいないからである。

「私は自分が遊んでいることを知っている」ということが遊びを導くのであるが、この意識は反省的レベルのものではない。子供はイリュージョンが日常的な現実と交錯してはならないことを心得ている一方、自分の自我の世界に他者が介入してくることは激しく抵抗する。いかに幼くても子供は、イリュージョン的遊びを、眼前に出現している自由として発見しているからだ。この発見は決して些細な出来事ではない。

子供がイメージ化に伴なう直観的なエネルギーに引きずられてしまわない限り、遊びと現実との区別は、子供自身の統制下にある。年少の子供にとって年上の遊び相手というのはいつも、不安をひきおこす脅威的存在としての役を象徴的に演じているものだが、こういう年上の子供と一緒に遊ぶ場合などは特に、イメージ化が情動性によって肥大してしまい、子供の統制能力を越えて一人歩きをはじめてしまうことをわれわれは知っている。

『怒ったオオカミ』のこは、学童期には楽しく遊ぶこ



とができるようになるが、幼児にはまだ遊びこなすことができずに、不安ばかりを惹き起こさせてしまう。

単純でそれほど情動を刺激しない遊びにおいては、幼児も、イリュージョンの『のような』性とそれに誘発される恐怖とを区別できる。(本物のお菓子のように)色をぬられたボール紙を、本物のお菓子だと言って見せても、三才児ですでに抵抗を示すことができるという点を明らかにした研究がある。大多数の子供がそのごまかしを即座に発見し、中にはそれをお菓子『のように』見立てて遊び始める子供もいたという。一方、他のグループの子供たちに対して、お菓子ごっこで遊ぼうという提案の下に同じボール紙を与えた際には、すべての子供たちがちゅうちゅ、よ、することなくこれに同意したともいう。^⑤ ch・ビュラーは自分の満二歳の子供がすでに、いかに意識的にイリュージョンを操作しているかについて実例を示している。(砂を固めてできた)ケーキを母親に向かって一緒に食べようと誘いかける。それでいてその子

供は、そのケーキが本当は砂でできているのだという事実を指摘することによって、そのイリュージョンを自ら取消しもある。もし母親がこの意味の変化に注意を払わないまま、それを『のような』のケーキとして扱い続けてしまうと、子供はこう言って制するだろう。「だめ、食べたらだめ。だって砂だもの。」

年少の子供はイリュージョンの世界を、自分の好きなように変えられると直観している。すでに三、四歳頃になると、なすがままに意味付与を行なう自由を見出し、いるのだが、その自由をまだ大きく見積りすぎていて、遊びの喚起される場である公共的な現実との結びつきはほとんど気づいていない。自我を他者に対してはつきりと際立たせようとするかたくなさが顕著になってくる。幼児期に、子供は自我体験を遊びの中にも多く投映させる。イリュージョンの世界から踏み出している場合でも、空想上の遊び友達が、自分を導いていく他我（もうひとつの自我）として喚起されるということがある。し

たがってこれは日常的な現実の中でも同時進行することなのだ。親の方もまだこの頃は、子供がわけのわからない仕方イリュージョンと日常の世界とを織り合わせていても、当面は寛大かつ許容的態度でいられるのである。

五、六歳になると、イリュージョンの世界がはつきりと人格的（私的）な特徴を帯びてくる。はからずも遊んでいる姿を誰かに見られてしまった子供が、捕えられてしまったような窮屈な感じを抱く場合などがそうだ。子供のイリュージョンの世界に登場する人間たちの担う役割には、子供なりの感情が普通以上に付帯されるようになるし、また、遊びが禁止される事態を予測できるようにもなる。さらには遊びが現実の世界において許されることなのか、許されないことなのかに注意を払うことが可能にもなる。

子供は成長するにつれて、関係性の意識を発達させるが、関係性における対話（ダイアログ）を通じて自らの個性にも気づくようになる。イリュージョンの世界

を、個人的な特有の領域として経験するのだ。小学生の年齢になれば、イリュージョンを秘密の領域として他者の目にふれないように押し隠そうとする。それを同時に貯えておけるイリュージョンをさらに創り出そうとするし、またそれができるようにもなるのだ。イリュージョンの遊びというものをここでは、内的世界を行為として表出すること(acting-out)として理解しているが、これはたしかに外的世界の何かとダイアログしながら喚起されるのであって、他者と共有している世界に織り込まれながら出来上がっていくものではない。^⑦

学童期になると、共有的現実が強調する秩序や具体的な諸意味にうまく適合できることがまず期待される。しかし親は、子供が形成していかねばならぬ実際のな意味だけではなく、遊びを通してイリュージョンにゲシュタルトを与える自由をも与えられる者なのだ。そのうえ親は、遊具を与えることによって、イメージ化に影響を及ぼし、遊びに刺激を加えさせる。

ここからわれわれの関心は遊具の刺激的意味へ向かっていく。遊具という公共的な意味を担ったものによって、子供は同時に、ある私的世界を創り上げられるのだろうか。遊具から示唆を受けてゲシュタルトを与える際、子供はいかに創造性を駆使して人格性を帯びたイリュージョンに関与するだろうか。

《原註・参考文献(抄)》

①前章の終わりにイリュージョンの遊びの人格的(私的)意味に言及した。ここでランゲフェルトの行なった「公共の意味付与」と「人格的(私的)意味付与」との区別が問題になる。世界を自分の目で見つめ、世界との親密なダイアログ(二極を内在した統一性)の下で(厳密に個人的なものであることを認識しつつ)意味付与を行なう自由を発見することによって、イリュージョンの遊びにおける私的な意味付与が可能になる。つまり私的(人格的)意味付与は、自我、および世界というベースベクトイブの中の固有な態度とも関連しているのであ

る。

やはりランゲフェルトが提出した概念である『隠れた場所』についてもここで言及しておきたい。子供は私的な世界を、公共的世界のもつ共同性から外れた場所での自らの前に招喚する。参照、「隠れた場所」(De 'verborgen plaats' in het leven van het kind) Utrecht, 1952.

②年少の子供は日常的現実性のある公共的な世界としても見做している。成長し、感覚と身体との親近性から距離をおけるようになるにつれて、安定した具体的な視点を確立していく。その結果日常的な現実性に、いわゆる客観的な側面が増大する。そうして私的な情緒的印象の方は子供自身から分離されるようになる。

③ J. Chateau によると子供は一歳になると仮構的状况、いわゆる「じっこ」的状况を喚起する行動を示すという。ここにはすでに創作する熱意が見られ、これによって人間の子供は抽象的・象徴的所作ができるようになる。(L'enfant et ses conquêtes, Paris 1960)

④一歳半の子供は言葉の象徴的機能を発見する。モノに

ついて話すときに、もはや実物を具体的に示す必要はなくなる。ランゲフェルト 'Ontwikkelingspsychologie' Groningen 1957 『発達心理学』

⑤ D. P. Ausubel, 'Theory and problems of child development, N. Y. 1958

⑥ Ch. Bühler, 'Kindheit und Jugend, Leipzig, 1931

⑦原註①参照。幼児は『隠された場所』をまだ公共の世界から閉ざしてはいないが、学童期になると秘密が意味をもつようになる。(じっこ)

(お茶の水女子大学大学院)